

## 環境モラルの育成 —自己評価法による自己更新と児童理解—

所属校：新宿区立落合第四小学校  
氏名：大木 秀政  
派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：環境モラル・胸中の公平な観察者・自己更新・価値創造

### I 研究の目的

現代、人類の開発・発展と地球環境の関係は大きな関心事である。ローマ・クラブによる『成長の限界』(1972)にもあるように人類の危機が論じられ、私たち人類の生存と地球環境は一体であることを認識していく必要性に迫られている。地球環境への配慮を促す環境教育の重要性も増す中、様々な実践がされているが、高森ら(1995 日本教科教育学会)が明らかにしたように、自然環境への「関心・知識」と「行動」との関連において、「関心・知識」と「行動」が必ずしも結びつかない実態がある。本研究では環境へのモラルに視点を置き、自然環境のよさに気付き、大切にしていく心情を育てることで、自然への配慮をし、行動を持続していく個を育てていくことを研究の目的としている。

アダム・スミスは道徳感情論で、人は「胸中の公平な観察者」を形成し、その基準に基づいて自分の感情や行為の適切性を判断するようになる」と述べている。環境モラルとはこのような「胸中の公平な観察者」が自然環境に対しての自身の感情や行為を見つめ、適切な判断をしていく規範意識であると言える。本研究では環境モラルを「人・もの・自然と自分とのかかわりに気付き、自然環境を大切に、よりよくしていこうとする心情」と定義する。さらに、「人・もの・自然」の3領域を含めたものを環境ととらえることとする。

### II 研究の方法

#### 1 調査研究

##### (1) 児童の自然環境への意識調査と実態調査

- ① 調査時期 平成21年9月
- ② 調査対象 東京都公立小学校4～6年生156名
- ③ 調査方法 質問紙法により Mann-whitney 検定を実施

##### (2) 授業前後による環境モラルチェックリスト比較調査

- ① 東京都公立小学校6年生22名の児童に授業の前後で18項目4件法で実施した。
- ② 「人」「もの」「自然」の3領域でチェック項目をそれぞれ6つずつ立てた。
- ③ それぞれの領域の6項目をさらに、「認知」「態度」「行動」の3観点に分けて質問内容を立てた。
- ④ 「認知」「態度」「行動」のそれぞれの項目のうち「自分」「他者」の2観点で質問項目を立てた。
- ⑤ 授業前と授業後に児童が自己評価し、18の項目のそれぞれの平均値を出して比較した。

##### (3) 授業後の環境モラルチェックリストの記述内容分析

児童の記述内容は、Berelson, B の内容分析のうち、言及事析によって、記述を意味内容の類似性に従い分類し分析を行った。

### 2 心情面における授業記録の分析

児童の思考の流れを授業記録を基に分析し図解化した。

### III 研究の結果

#### 1 調査研究

##### (1) 児童の自然環境への意識調査と実態調査結果

児童の意識調査においては、自然が「好き」と「嫌い」の意識と人・もの・自然の3領域への配慮行動の関係を分析した。その結果、「人」に5%水準で有意であった。 $(*Z=-2.399, P<.05)$  つまり、「もの」と「自然」についての配慮には、自然が「好き」「嫌い」に差がなく、「人」にだけ明らかな差があるということである。(表1、表2)「好き」の理由を分類すると、当初、自然そのものへの関心が直接的な理由に挙げられると予想していたが、実際には自然の中で友達と一緒に遊べるから等の理由を挙げている記述が多く、児童にとって自然が「好き」と人間関係とは密接につながっている事実が見られた。この結果から、(2)の比較調査の際に「もの」と「自然」の領域について特に視点を当て、授業前後の結果にどのような変容が見られるかに注目した。ただし、分析においては「好き」と「嫌い」に差があるのは事実である。

表1 Mann-Whitney 検定

|        | 好き    | N   | 平均ランク | 順位和      |
|--------|-------|-----|-------|----------|
| 人への配慮  | 1 きれい | 12  | 49.58 | 595.00   |
|        | 2 好き  | 144 | 80.91 | 11651.00 |
|        | 合計    | 156 |       |          |
| ものへの配慮 | 1 きれい | 12  | 68.67 | 824.00   |
|        | 2 好き  | 144 | 79.32 | 11422.00 |
|        | 合計    | 156 |       |          |
| 自然への配慮 | 1 きれい | 12  | 70.38 | 844.50   |
|        | 2 好き  | 144 | 79.18 | 11401.50 |
|        | 合計    | 156 |       |          |

表2 検定統計量<sup>a</sup>

|                  | 人       | もの      | 自然      |
|------------------|---------|---------|---------|
| Mann-Whitney の U | 517.000 | 746.000 | 766.500 |
| Z                | *-2.399 | -.841   | -.687   |
| 漸近有意確率 (両側)      | .016    | .401    | .492    |

a. グループ 化変数: 好き \*Z=-2.399, P<.05

##### (2) 授業前後による環境モラルチェックリスト比較調査結果

この調査においては表3にある通り、18項目中13項目で前回よりも平均値が上がった。一方、「もの」と「自然」への平均値のうち、4項目については平均値が下がるという結果が出た。当初の予測では、授業を通して自然環境を学び、自然環境への配慮行動を実践することで、平均値は上がっていくものと考えていたが、異なった結果が出た。

表3 環境モラルの平均値の差

|      | 「人」<br>平均値の差 | 「もの」<br>平均値の差 | 「自然」<br>平均値の差 |
|------|--------------|---------------|---------------|
| 認知自分 | 0.247        | 0.296         | 0.003         |
| 認知他者 | 0.022        | 0.252         | 0.607         |
| 態度自分 | -0.027       | 0.003         | -0.196        |
| 態度他者 | 0.011        | 0.161         | 0.165         |
| 行動自分 | 0.223        | -0.404        | -0.223        |
| 行動他者 | 0.210        | -0.120        | 0.188         |

(3) 授業後の環境モラルチェックリストの記述内容分析結果

表3のような結果について、環境モラルチェックリストの自分にとっての意味を質問した記述を分類すると、比較しながら自己評価することで、これまでの自分の確かめや自分自身の発見、心情の変容について述べているものが多く見られた。

前と今の自分を比べる中で、実際に行動したことから現実の厳しさに直面し、以前の自己評価が高すぎたという認識を新たにもつという自己への気づきがあった。「もの」と「自然」への自己評価の低下傾向は、自己を厳しく見つめ直した効果から生まれたものと思われる。児童は記述の中で「自分自身の環境に対しての無知さを教えてくれた第三者のような存在」と述べている。環境モラルチェックリストは自分としての今までを振り返り、これからの自分の生き方を模索していく契機になっているようだ。

2 心情面における授業記録の分析結果

授業は総合で「循環の学習」を行った。1枚の葉っぱからそれぞれの気づきをつないでいき、自然界の循環のシステムという法則性を児童が学びながら発見していくという授業デザインである。この学びを通して児童は自分たちの力で知を生み出していくことができることに驚き、喜びを味わっていった。追究を続けていく中で、自分たちにできる循環を生活の中で実践し取り組んでいった。授業記録の分析から児童の思考の流れは以下のようなことであると分かった。(図1)

- ① 児童は自分の足元から帰納的に学びを追究し未来を思考していった。そして、未来から逆算して、今自分にできることは何だろうかと考え、誠実に行動していく。このような思考の流れの中に心情面の高まりがあった。
- ② つながりを大切にしながら思考していくことで、子供は足元から思考し、自分ごと、自分と関連付けながら主体的に知識を求め広げていく。

- ③ ②のような知識のつながりは自分だけのことを考えるのではなく、世界や地球、生命を思考していき、そこから再び自分を見つめ直していく。
- ④ 子供はよりよく生きようとしている存在であり、あらかじめ教師が想定していた以上のことを思考し、価値創造しながら自己実現へ向けて追究していく。

このように児童の自然環境への心情は深まり、自己の生き方を模索をしている姿が浮き彫りになった。

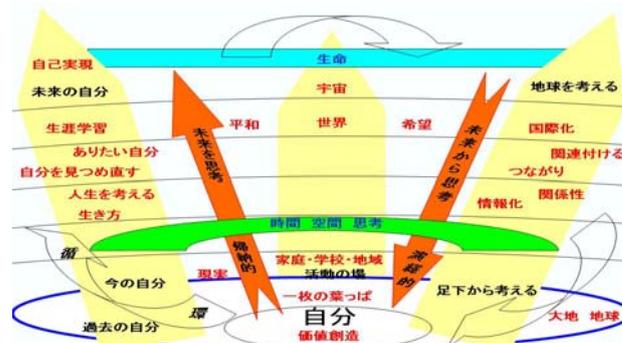


図1 学習の構造

表3にある低下傾向の項目については、リアリティのある社会との接点において、現実の困難さと直面したことによる自己更新を図った記述が多く残されており、児童が自分に正直に感じことを、記述でも環境モラルチェックリストにおいても表現しており整合性があった。授業記録と記述の分析による心情面の質的変化を分析したことは、環境モラルの比較調査の結果を裏付ける意味でも有効であった。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 環境モラルのチェックリストを授業前後で活用することで、環境モラルの定着度を児童自身が見取っていきける。
- (2) 児童自身が振り返りをし、自己評価していくことで、今までの自分に気づきながら、これからの自分の生き方を考えていく自己更新の契機となる。
- (3) 環境モラルを自己評価していくことで、これまで心情という見取りづらい側面を可視化できた。
- (4) 環境モラルを観点別に分類したことで、どの観点が今後の課題となるか見取ることができ、教材研究の視点となる。
- (5) 自然環境を考える学びは教育活動全般に渡って行えるので、教科・領域を問わず環境モラルチェックリストを活用できる可能性がある。

2 課題

- (1) 環境モラルチェックリストの一般化を図ること。今回の結果を更に分析し、チェック項目の妥当性をもつことが必要である。
- (2) 様々な教科・領域での実施と地域性が違う場所における妥当性の分析が必要である。

<引用文献> 『アダム・スミス』 堂目卓生 中公新書 (2008)